
神崎すみれ誘拐事件

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

神崎すみれ誘拐事件

【Nコード】

N1745A

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

すみれが何者かに誘拐された！そして、その時からすみれVS誘拐犯の戦いが始まった。

前編

太正十二年十月のこと。

大帝国劇場・帝劇のサロンに真宮寺さくら、マリア・タチバナ、アイリス、李紅蘭の4人が集まってなにやら話をしていた。と、

「…おい。あのサボテン女、まだ帰ってきてねえのか？」

サロンに入ってきた桐島カンナが言う。

「そうらしいわね。もう七時すぎだっていうのに…。お店だつてとつくに閉まつているはずよ」

マリアが言う。

カンナの言う「サボテン女」 神崎すみれが「久しぶりのお休みですし、ちよつと買物に行つて参りますわ」と大帝国劇場・帝劇を出てから早や半日近くになるうとしていた。

「…本当にどうしたんでしょね。明日もまた公演があるっていうのに…」

「あの女、ひよつとして北海道の方にも買物に行つちまつたんじやねえのか？」

「いや、ウチは九州の方やと思うけど」

「すみれのことだからきつとフランスにでも行つたんだよー」

「まさか、そんなことは…」

それから程なく、大神一郎と藤枝あやめの二人がサロンにやつてきた。

「あ、どうでした？」

さくらが大神に聞いた。

「うん…。神崎家の方には来てなかつたつて言うよ」

「…花やしき支部の方はどうなんや？」

紅蘭があやめに聞いた。

「こつちも同じ。花やしき支部でもすみれらしき人は見かけてない、

って言うわ」

「でも神崎家や花やしき支部の方でもすみれ君の事を探してくれる
そうだ。何かあったら帝劇の方に連絡を入れるように頼んでおいた
よ」

「有難うございます」

「マリアが言う」

「…それにしてもすみれさん、どうしたんでしょうか…」

*

話はこれより六時間ばかり前の午後一時過ぎのことだった。

銀座にあるデパートのある売り場。

「…それじゃ、お届け先は大帝劇場でよろしいですね？」

店員がすみれに聞いた。

「結構ですわ。それじゃ、後はよろしくお願いしますわ」

すみれがちょうど買い物済ませたところだった。

「ありがとうございました」

帝劇のトップスタアであり、神崎財閥の令嬢、そして店にとって
も大事なお得意様、と言うこともあってかその場にいた従業員が全
員集まってすみれに対し深々とお辞儀をして見送った。

そしてすみれがデパートを出たときだった。

一人の男が物陰からじつとすみれの方を見ていた。

男は懐に入れてあった雑誌の切抜きを広げる。

(か、神崎すみれ…、あの女だ)

男の持っていた切抜きにはすみれの写真があった。

そして切り抜きを握り潰す。

この日のために男は何日も前から準備を進めてきた。彼女の行動
パターンもすべて頭に叩き込んだ。そして事を進めるために何が重
要かも…

(…落ち着け。抜かりはないはずだ)

そして男はそつとすみれの後を付けて行く。

その通り道は銀座だというのにややさびしい通りで、そのときも人通りがなかった。

しかし、この道は大帝国劇場への近道でもあるのだ。
すみれも迷うことなくその道を通っていった。

(…よし、今だ！)

男は脱兎のごとく飛び出すと、すみれの背後から鼻と口に布を押しつけた。

「…！」

すみれは必死にもがいた。

しかし、男も必死になってすみれの口をふさぐ。

やがてすみれが気を失い、男にもたれ掛かった。

男は辺りを見回すと、あっという間にすみれを連れてその場を去っていった。

*

ぼんやりとだが、すみれの意識が戻ってきた。

すみれは辺りを見回す。

そして体を動かそうとするが、動かなかった。

「う…うぐ…んん…」

しかも口も何かで塞がれている。

そう、すみれは猿轡をかまされ、後ろ手に縛られていたのだ。

(…なんでわたくしが…？ いったい、どういうことですか？)

しかし、すみれは自分の意識がはっきりしてくるにつれ、自分の置かれている立場がわかって来た。

すみれはあたりを見渡す。

(…ここは…)

裸電球一個だけの部屋に閉じこめられているようだ。

(…まさか…、まさかわたくし…)

「…気が付いたのか？」

男が近付いてきた。

すみれは猿轡をされたまま、男をにらみつける。

「うぐ…うぐ…、うぐ！」

猿轡をされたままの口で何やら言っている。

「な…なんだよ！」

「うぐうぐうぐ！」

「…取れ、って言うのか？」

「うぐ！」

すみれは頷くと男をキツ、と睨み付ける。

その目にはとてもではないが逆らうことを許さないような怖さがあつた。

「…わ…、わかったよ」

そう言うとも男はすみれの猿轡を取った。

すみれは大きく息を吐くと、

「あなた、いったいどういづつもりですか？」

「どういづつもり、って…。お、おまえ、自分がどんな立場にいるのか知ってるのか？」

「少なくとも上流階級の皆様が集まるパーティに招待されたとは思えませんか。それよりあなた」

「な、なんだよ」

「この縄を解いてくださいませんか？」

「そ、そんなことできるかよ」

「わたくしを誰だと思ってるらっしゃるの？ 花組のトップスターで神崎財閥令嬢、神崎すみれですよ！ わたくし、逃げも隠れもいたしませんわ！」

すみれは男を睨み付けた。

「う…、わ、わかったよ」

男はすみれを縛っていた縄を解いた。

すみれは手首をさすりながら、

「まったく、このわたくしの白魚のような柔肌に縄の痕なんかを着

けるなんて…。あなたはどうお考えになっただろうのかわかりませんが、わたくしをこんな誘拐なんて面倒臭いことに巻き込まないでください。」

「…お、おまえ…」

すみれはそこにあつた椅子に腰掛けると、

「…正直わたくしもこう言う立場ですから、幼い頃から誰かに誘拐されることはあるかもしれないと思っていましたけど…。まさかこの歳になってこんな形で誘拐されるなんて思いもしませんでしたわ」

「……」

「まあ、よろしいですね。わたくしはあなたにとって大事な人質ですもの。わたくしが生きるも死ぬもあなた次第、って訳ですわね」

「そ…、そういうことだけだな…」

「何を心配なさってるの？ さつきも行ったとおり、わたくし、逃げも隠れもいたしませんわ。わたくしが何か変な事をしようと思つたら遠慮なく私を殺しても構いませんわよ。…もともと、あなたにそれだけの勇気があれば、ですけど」

そう言うすみれは不敵な微笑を浮かべた。

*

そして再び話は帝劇に戻る。

夜8時近くなつたと言うのにまだにすみれが戻ってこないことから花組はもとより、既に帰宅していた藤井かすみ・榊原由里・高村椿の3人にも非常呼集がかかり、全員が帝劇に集まっていた。

とりあえず支配人である米田一基名義で警察に捜索願を出すとともに、帝劇の他の組 月組、風組、夢組、雪組の4つの組にも協力をお願いし、すみれの捜索に当たることになった。

それと同じ頃。

「…あなた。何ですか、これは？」

すみれが自分の前に置かれた食事の乗った盆を指差して言う。

「め…、メシだよ」

「これが食事ですって？ ……こんな、ウチの犬でもまたいで通るよ
うな餌をわたくしに
食べるというんですの？」

「え、餌？」

すみれは紙と鉛筆を取り出すと、何かをさらさらと書き、突き出した。

何やら電話番号と、男が聞いたこともないような名前の料理が書いてあった。

「な、何だよ、これは？」

「ここに電話して、出前を取ってもらいなさい」

「お、おい、おまえ…」

「神崎家のツケと言えば、持って来てもらえますわ。近くの自動電話にでも行って注文していらっしやい！」

「しかし…」

「大丈夫、わたくしはあなたの大事な人質ですよ」

「…でもそんなことしたら、オレがお前を誘拐したことがわかってまうじゃねえか！」

「わたくしの知り合いだとしても言っておまかしておきなさい！」
すみれの言い方には何事にも逆らえないような感じがした。

男はひとつ舌打ちをすると、

「…逃げようなんて思うなよ」

「わかっておりますわ」

そして男は出て行った。

外で何やら鍵を掛ける音がした。

「…本当にわたくしを信用しておりませんかね」
すみれが呟いた。

*

「…とりあえずすみれの行動があるところまでわかった」
米田が花組を前にして言った。

「…どうなんですか？」

「うん。午後1時ごろに銀座の中のあるデパートを出るところを目撃したヤツがいたそうだ。ほら、すみれのことだから相手もそうと気づいたんだろうな。それから帝劇の方角に向かって歩いているところまでは目撃されてるんだがそれからの足取りがわかっていないそうだ」

「でも、銀座言つてもそんな、迷子になるような道はないやろ？」

紅蘭が言う。

「まあ、そうなんだが……」

「……となると……」

大神がつぶやいた。

「……大神はん、どうしたんや？」

「いや、なんでもない」

……しかし大神の脳裏にはあるひとつの言葉が思い浮かんでいた。

もしかしたらそれは花組の全員も同じだったかもしれない。

*

「……ねえ、ちょっとよろしいかしら？」

すみれが辺りを見回すが、そこに男はいなかった。

「……お手洗いにでもいかれたのかしら？」

すみれは辺りを見回す。……と、机の上に古新聞と何やら紙が置いてあった。

「何かしら？」

すみれは机の上にある紙を見る。

そこには隣においてある古新聞の活字を切つて並べられており、

「神崎忠義へ」

お前の孫の神崎すみれを預かつてある。

返して欲しくば十萬圓を用意して、上野公園の西郷隆盛像の前へ来い。

警察には報せるな。報せた場合、彼女の命は保証できない」

…という内容の脅迫状が置いてあったのだ。

「あらやだ、脅迫状ですわね」

「…お、お前何見てるだよ！」

丁度そこに男が戻ってきた。

「…あなた、一寸いらっしやい！」

すみれが男を呼んだ。

「な、なんだよ」

「何ですの、これは？」

すみれが男に紙を見せる。

「きよ、脅迫状だよ」

「そんなこと最初からわかってますわ。それよりもなんですの、この内容は？」

「内容、つて…」

「わたくしの身代金がたつたの十万円ですつて？」

「た…、たつたの十万円？」

「この花組トップスタアのわたくしも随分と安く見られたものですわね。十万円なんて端金、わたくしのお祖父様にとっては痛くも痒くもありませんわ！」

「は…、端金？」

「ええ。わたくしの身代金は五十万円になさい！」

「ご、五十万？」

「わたくしにはそのくらいの価値が充分、いえ、むしろ五十万でも安いくらいですわ！ それから」

「それから？」

「これと同じ内容の脅迫状を大帝國劇場の米田一基支配人宛にも送りなさい」

（後編に続く）

前編（後書き）

（作者より）この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載されていますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

後編

結局すみれは帰ってこずにあつという間に夜が明けてしまった。そんな大帝國劇場。朝早くのことだった。

「みんな、大変だ！」

米田が花組全員を呼んだ。

「支配人、どうしたんですか？」

支配人室に花組全員と、結局帝劇に泊まって朝を迎えた三人娘が駆け込んできた。

「こんなものが郵便受けに入っていた」

と米田は封筒を見せると、中の紙を取り出し、一同に見せた。それには新聞の活字が貼りつけてあり、

「大帝國劇場 米田一基支配人へ

花組トップスタアの神崎すみれを預かつてゐる。

返して欲しくば五十萬圓を用意しろ。

警察には報せるな。報せた場合、彼女の命は保障できない
追つて連絡を寄越す」

という内容が書かれてあつた。

「これ、脅迫状だよ……」

「アイツ、誘拐されていたんか」

「せやけど、五十万とはなあ……」

「すみれは神崎財閥の令嬢だもの。その位は取れると踏んだんでしようね」

「でも、なんですすみれさんの実家じゃなく、こつちに要求したんでしょうか？」

花組の五人は侃々諤々の議論をかわした。と、
「そんなことよりも、みんな」

とあやめが話をさえぎった。

「あ、そう言えばそうですね…。支配人、どうしましょうか？」
マリアが米田に聞いた。

「どうする、ってよお…。やっぱり警察に連絡するしかねえだろうが」

そして花組は討論の末、警察に連絡をし、連絡を受けた警察が帝劇にやってきてどたばたしていた頃。

支配人室に1本の電話が掛かってきた。

「米田だが。…あ、かすみか。…判った、こつちに回してくれ。…あ、これはこれは神崎さん。お世話になっております。米田です。…して、ご用件は？…なんですか？…解りました、有難う御座います」

「…どうしました、支配人？」

「…神崎家にも同じ内容の脅迫状が届けられたそうだ」

「…それじゃあ…」

「いや、詳しいことは、脅迫状に書いてある『連絡』を待たんと駄目だろ」

*

一方こちらは誘拐され、監禁されているすみれ。

「…そろそろ、到着している頃ですわね」

すみれはそうつぶやいた。

神崎家と帝劇に同じ内容の脅迫状が届いたことにより、今現在向こうも対応に追われているだろう。

「…あとは…」

「…おい、どうしたんだよ？」

すみれのもとに一人の男　　そう、彼女を誘拐した男　　が近づいた。

「いえ、何でもありませんわ」

「…本当に大丈夫なんだろうな」

「お忘れかしら？ 私は大事な人質ですわよ。いくらなんでも自分の娘の事を大事に思わない親はおりませんわ」
「…そりゃそうだけど…」

(…やっぱり思ったとおりの方でしたわね)

すみれは自分を誘拐した男を見てそう思った。

(その気になればいつだって私を殺せるものを…。この方は私をどう扱っていいかきつと困ってらっしやるんですわ。ま、どう出るか判りませんが、もう少し様子を見てみますわ…。あとは、この方が私の考え通りに動いてくださればよろしいのですけど…。少なくとも今の時点では私のほうが優勢のはずですわ…)

すみれはふと小さな頃から祖父・神崎忠義に教わっていた事を思い出した。

忠義は小さな頃からすみれに対し「まずどのような場でも相手より優位に立つこと。そうすればどのようになった時でも自分の思い通りに事を進めることができるし、何よりも自分の気持ちに余裕が出来る」と言っていた。

そのようなことがあったら、すみれは今日まで「相手に見下されてはいけない」とばかりに自分が優位に立つべくさまざまな手を打ってきた。それは帝国歌劇団のトップスタアとして舞台上に立っている今でも変わらない。

確かに自分が誘拐された、と知った時はさすがに慌てた。しかし、ここで自分が弱みを見せたらそれこそ相手の思う壺。下手をしたら用なしとばかりに殺されてしまう…。

もちろんすみれもそんなことは嫌だから、祖父の教えに従い、自分が有利に立つために犯人と戦うことにしたのだ。

もつとも身代金を50万円に吊り上げたのは自分自身にそれだけの価値がある、と信じていたのも事実だが。

とにかく、今大事なのは自分が救出され、無事に大帝園劇場に帰

るために次の一手を考えることだ。

そして、犯人にその隙を見せないことも…。

(…もつとも、私に掛かれればこんな演技、ちよろいものですわ) そう思うとすみれはひとりでに笑いがこみ上げてきた。

「…おい、何笑つてんだよ！」

「いえ、何でもありませんわ」

*

その翌日のことだった。

「支配人！」

あやめが支配人室に入ってきた。

「どうしたんだ、あやめくん」

「こんなものが先ほど届けられました」

そう言つてあやめが封筒を差し出す。

封筒には何も書いてなかった。

「…支配人、これは…」

「…かもな。あやめくん、大至急全員を呼び出してくれ」

「わかりました」

*

そして花組の全員が集まったのを確かめた米田は、封筒を開けた。昨日同様、新聞の活字を張り付けた紙が入っており、

「身代金の受け渡し方法を教える。

五十萬圓を鞆に入れ、大帝國劇場の大神といふ男に鞆を持たせ、

明日の午後三時に上野の西郷隆盛像の前に来い。

そして鞆を置いてすぐに立ち去れ」

との内容の文が書かれていた。

「…やつぱりな…」

おそらく、そばにいた全員が予想したであろう、身代金受け渡しの方法を書いた紙が入っていたのだ。

「…それにしても…」

「マリアがつぶやいた。」

「…どうした？」

「なぜ、犯人は隊長を身代金の引渡し役に指名したのでしょうか？」

「…そういえばそうだな…」

そしてその傍らで大神が封筒を調べていると、

「あれ？」

封筒の中に何か小さく折り畳んだ紙が貼ってあった。

「どうしたの、大神くん？」

「あやめが聞いた。」

「いえ、こんなものが…」

そう言いながら大神は中の紙を慎重に剥がして開いた。

「心配御無用、もうすぐ皆さんのもとに戻りますわ。」

「ここは犯人の云ふ通りにして上野公園へ来て下さい。」

「但し、身代金の用意はいりませんわ。古新聞でも切つて用意して

下さい。」

それから、脅迫状のとおり上野公園へは少尉が来て下さい。」

すみれ」

と書いてあった。

「これは…。すみれくんの字だ」

「なんですって？」

そして全員が集まり、大神の持っている紙を見る。

「…よくまあ、犯人に知られなかったわね」

「うん。それにしても何ですみれ君もこんなものを…」

そして大神が紙を裏返した時だった。

「…これは…」

「…隊長、どうしたんですか？」

マリアが聞くが、

「…いや、なんでもないよ」

*

「…おい」

男がすみれに話しかけてきた。

「なんですか？」

「本当に大丈夫なのかよ」

「何が、ですか？」

「あんたの言うとおり、その、大神ってヤツに身代金を持ってこさせるようにしたけどよ…」

「大丈夫ですわ。わたくしは少尉をよくご存知ですけど、あの方は信用できる方ですわ。少尉なら必ず持つてきてくれますわ」

(…それにしても…。隙をみてわたくしが封筒に張り付けた紙に気がつかないなんて、どこまで抜けている方なのかしら?)

そう、相手の隙を見て、大神たちでの伝言を書いた紙を貼り付けておいたのだ。大神なら必ず気がついて読んでくれる、そういう計算があつたからだ。

(…それに、あのことも普通ならおかしいと思うはずですわ…)

*

翌日の午後3時近く、上野公園。

あたりは刑事が張り込み、その中に大神がいた。

「いいですか。身代金の受け渡しが我々にとつても犯人逮捕の絶好の機会です。くれぐれも慎重に対応してください」

「判りました。それにしても…」

「なんですか？」

「本当に大丈夫でしょうね」

「大丈夫です。念のために我々も二段作戦を打つことにしたんですから」

そして大神は上野公園に入ってしまった。
西郷隆盛像の前に来ると指示通りに鞆を置いた。
そして大神は何事もなかったかのようにその場を立ち去った。

それからどのくらい経っただろうか、その西郷隆盛像の前に一人の男がやってきた。

男は辺りを見回すと、すばやくその前においてある鞆に手を伸ばした。

そしてその鞆を手にとると何事もなく歩き出した。

*

銀座のある町の一角。

一人の男があるビルディングの前にやってきた。

右手にはここを出る時には持つていなかった鞆を何故か持つていた。

男はあたりに誰もいないのを確かめるとポケットから鍵を取り出すと、鍵穴にそれをいれ鍵を開ける。

そして中に入ろうとドアのノブに手をかけたその時だった。

不意に物陰から3〜4人の男が飛び出してきた。

「な…なんだあ！」

男が声を上げるが、あっという間に組み伏せられ、その手には手錠がはめられた。

「我々は警察だ！」

「…誘拐及び脅迫容疑で逮捕する」

男たちが口々に言う。

それを横目に見ながら大神が中に飛び込んだ。

「すみれくん！」

「少尉！」

すみれの声が聞こえ、大神に駆け寄ってきた。

「よかった、無事だったんだね」

「ええ、おかげさまで」

*

「…なんでここが判つたんだよ！」

刑事たちに連行されながら男が言う。

「…こついうわけなんですよ」

そう言うつと大神は一枚の紙をポケットから取り出した。

「…これは…」

「心配御無用、もうすぐ皆さんのもとに戻りますわ。」

ここは犯人の云ふ通りにして上野公園へ来て下さい。

但し、身代金の用意はいりませんわ。古新聞でも切つて用意して下さい。

それから、脅迫状のとおり上野公園へは少尉が来て下さい。

すみれ

例の伝言だった。

「実はね、すみれくんがこつそりとこんな伝言も伝えてたんですよ」

そう言いながら大神はその紙を裏返した。

「これは…」

それにはある店の名前が書いてあり、「この方に聞けばわたくしの居場所がわかりますわ」と書かれていたのだった。

「…すみれくんは昨日、何でも夕食に出前を取つたらしいですね。」

当然出前を取る際には自分がどこで受け取るか言うものです。案の定、この店に聞いてみたら、『神崎家のツケにして持ってきて欲しい』との伝言があつたそうです。それさえわかれば後は簡単です。自分は刑事さんに頼んでこの近くを張ってもらいました。そこをあなたが戻ってくれば、すみれくんがその中にいるくらいは誰だつてわかりますよ」

「う…」

「どうやらあなたの考えていた以上にすみれくんは頭の切れる人物

だった、と言うことですよ」

そして男が連行されていく。

「まずは、ご無事で何よりでした」

「いえいえ、このたびはご迷惑をおかけしましたわ。あとでお祖父様にもわたくしの方から伝えておきますわ」

すみれが刑事に向かってそう言うと、

「どうもすみませんでした」

そして刑事たちは去っていった。

*

ひとまず事件が解決し、すみれが警察で事情を聞いて帝劇に戻って頃には既に夜が更けていた。

すみれは自分の部屋に戻り、サロンには花組の残りの5人がいた。

「…とりあえず、すみれが無事に戻ってきて安心したわね」

マリアが言う。

「…にしてもよお、あんなワガママが服着て歩いてるような女誘拐するなんて、犯人もなーに考えてんだかねえ」

カンナが言う。

「ホンマやな。犯人もすみれはんにはほんと手え焼いたんとちゃうか？」

紅蘭が言う。

「そういえば大神さんが言ってたんですけどすみれさん、自分が誘拐されてるといふのに

犯人を顎で使ってたらしいですね」

さくらだった。それに続いてアイリスが、

「それにすみれ、自分で身代金の額を決めた、って言うよ」

「…まあすみれの場合、自分がどういふ状況に置かれているのかちよつとわからなかったのかもね。誘拐された直後に殺されてたかもしれないのよ」

マリアが言う。

「身代金さえ手に入れば犯人にとって、人質なんてもう用なしだからね。でも、身代金誘拐というのは犯人にとってもリスクが大きい犯罪なのよ。そんな危険を冒してまで犯行に走る価値が何処にあるのかしら?」

花組の面々の話を聞いていたあやめが初めて口を開いた。

「ま、あんなワガママ女誘拐すること自体が間違ってた、ってことだよな」

「…誰がワガママですって?」

一同の背後で声がした。

「あ…、す、すみれはん…」

そう、いつの間にやらすみれがそこに立っていたのだった。

「いや、その…。すみれが帰って来て良かったな、って話してたんだよ、な?」

「そ、そうや。すみれはんが殺されたりしたら大変やったな、って言うってたんや」

慌ててその場を取り繕うとする一同。

「本当かしら?」

「な、何疑つとるんや。すみれはんは花組の大事な一員やから、な?」

「ふーん…。それならよろしいんですけど…」

そういつてすみれはその場を去っていった。

「…ふう…、やっぱりすみれはん相手には下手なことはできんわ」

「そうだろうね。すみれくんを敵に回すと大変なことになるかもしれないよ」

大神が言った。

「どういうことですか?」

「カンナの言葉じゃないけど、今回の事件はすみれくんを誘拐したこと自体が犯人の間違いの始まりだったかもしれないな」

(おわり)

後編（後書き）

（作者より）この作品は作者の開設している「ともゆきのホームページ」が「小説家になろう」のNW・SYSTEMを使って掲載されていますが、「採点システム」は採用していません。

この作品の感想等は「ともゆきのホームページ」のBBSの方にお願ひします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1745a/>

神崎すみれ誘拐事件

2008年11月7日07時06分発行